特別
チ12
3643
56

謡本引入之新和歌

万　初春のはつねのけふの玉箒手にとるからにゆらぐ玉の緒　家持

万　大宮のうちまできこゆあびきすとあごとゝのふる海人のよび声　意吉麻呂

万　吉野なる夏実の川の川よどに鴨ぞ鳴くなる山陰にして　湯原王

万　あかねさす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる

万　こゝちゐるかりがねの音のいちずら紫すしはまさらであらてまされし　読人しらず

万　あすよりは若菜つまむとしめし野にきのふもけふも雪はふりつゝ

万　夏の野の茂みにさける姫百合のしらえぬ恋は苦しきものぞ　坂上郎女

万　あさぎりに堀江の川はふなぎほひ来ゐきみ川は静なるかも

万　さくにはるし流れてやつこ白雲はおもひし山の上にみえけらし　大伴宿

後　春霞たなびきにけり久方の月のかつらも花や咲くらん　貫之

後　人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

後　志のぶ山浅茅が山もとあまたしばふの網ひやなかるらん　後河

後　常よりも春べになれば桜河波の花こそまなくよすらめ　貫之

万葉　古今　後撰　拾遺　後拾遺
金葉　詞花　千載　新古今
新勅撰　月清　続詞花　万代
古今六帖

故梅若誠太郎氏
昭和四年十二月廿日
梅若重戸氏
寄贈

万　初春はそつ孫乃ゝふめ玉帚ゑにとかりてゆゝ玉乃弦　家持

万　大宮乃つもまできこゑひびきそとゆごとの琴乃よび都多　高麻呂

万　吉野なるまつ山乃川よりとに鳴て山ほとゝぎす　湯原王

万　ほろゝさしゆふ野ゆき吉野ゆ玉ゆ玉ゆ神ふる

万　こ物なるかゞ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

万　なつ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　読人しらず

万　夏なれ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　読人しらず

万　あぎとふ堀川乃川ゆ乃ぎ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　坂上郎女

万　なくこゑ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　大伴宿禰

後　吉野乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　貫之

後　人ゆ釈乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　後河

後　去乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　貫之

後　常よりも去ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　後河

故梅若誠太郎氏
昭和三十年
梅若重子氏
寄贈

後十七 たらちめはかゝれとてしもうば玉の我黒髪をなでずや有けん　遍昭

後 いとゞしく過ゆく方の恋しきにうらやましくもかへる波かな　業平

後八 秋の夜の月見ることにさやけさにさゞなみたちて紀の関も見えずなりぬる　讀人しらず

後 ゆく道とも遠しともいはなくにかぎりなき道のほどにけぬる身なれば

後 さがの山みゆき絶にし芹川の千代のふる道跡はありけり　行平

後 ゆくほたる雲の上までいぬべくは秋風ふくと鴈につげこせ　業平

後 これや此行も帰るも別れてはしるもしらぬも逢坂の関　蝉丸

拾 君が住宿の梢をゆくゆくとかくるゝまでにかへりみしはや　菅贈太政大臣

拾 陸奥の安達の原の黒塚に鬼こもれりといふはまことか　兼盛

拾 水の面に照月なみを数ふれば今宵ぞ秋の最中なりける　順

拾 かくばかりへがたく見ゆる世中にうらやましくもすめる月哉　高光

拾 我宿の菊の白露けふごとに幾世たまりて淵となるらん　元輔

拾 神なびのみむろの岸やくづるらん竜田の川の水のにごれる　高向草春

むろの本

拾一 我宿の梅のたち枝や見えつらん思ひの外に君が来ませる　兼盛

拾 こゝにしも何にほふらん女郎花人のものいひさがにくき世に

拾 見渡せば松の葉白き吉野山いく世つもれる雪にかあるらん　兼盛

拾 子の日する野べに小松のなかりせば千代のためしに何をひかまし　忠岑

拾 みちとせになるてふ桃の今年より花さく春にあひにけるかな　躬恒

後拾 夏の日になるまで消ぬ冬氷春たつ風やよきてふきけん　元真

後拾 心あらん人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを　能因△

後拾 松島や雄島の磯にあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか

後拾六 かもめこそよがれにけらし猪名野なる昆陽の池水うはごほりせり

後拾 桜をさかりにちりなんとおもふかはてもかぜのいとをしき哉　永源△

後拾 秋の月峯ゆく梢より時雨て渡るこゝ万べの空　永胤△

後拾 君が代は千代にひとたびゐる塵の白雲かゝる山となるまで　嘉言

金 住侘て我さへ軒の忍草しのぶかたがたしげき宿哉　周防

金　大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立　小式部

千　人しれぬ大内山の山もりハ木がくれてのみ月を見る哉　頼政

千　夕されば野べの秋風身にしみて鶉なくなり深草の里　俊成

千　さりともと思ふ心も虫の音もよわり果ぬる秋の暮哉　〃

千　越て今ぞ知るへかへる山名にのみ時の名にこそ有けれ　頼政

新　道のべに清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立とまりつれ　西行

新　志る露けさけ袖のことばなきおもひくらし夕暮の空　有家

新　きのふだにとはむと思ひし津の国の生田の森に秋はきにけり　家隆

新　世中をいとふまでこそかたからめかりのやどりをおしむ君哉　西行

かへし

新　世をいとふ人としきけば仮の宿に心とむなと思ふ斗ぞ　遊女妙

新　明ぬとて野べより山に入鹿の跡ふきおくる萩の下風　通光

新　時しらぬ山ハ富士のねいつとてかかのこまだらに雪のふるらん

新　津の国の難波の春ハ夢なれや葦の枯葉に風わたるなり　西行

新　うつりゆく雲に嵐の声すなりちるかまさきのかづらき山　雅経

新　志ら玉か何ぞと人のとひし時露とこたへてけなまし物を

新　ちるひもさこそハ雲の上ならめやどれる月の袖のせばきに

新　いづくにか今宵ハ宿をかり衣ひもゆふ暮の峯のあらしに

新　玉の緒よ絶なば絶ねながらへば忍ぶることのよわりもぞする　式子内親王

新一　降つみし高根のみゆきとけにけり清滝川の水の白浪　西行

新二　夏はつる扇と秋の白露といづれかまづはおかむとすらん

新十三　きくやいかにうはの空なる風だにもまつに音するならひありとは

新六　やさしき世に浅茅色づくほどちかき山峯あまのことそおもへし

新古　花ちりし庭のあさきは空まよひなき人にあふ山さくら哉　長家

新　花さそふひらの山風吹にけり漕ゆく舟の跡見ゆるまで　宮内卿

新　見渡せば山もとかすむ水無瀬川ゆふべハ秋となに思ひけん　太上天皇

新　夕づくよ汐みちくらし難波江の芦のわか葉をこゆる白浪　秀能

新　むすまとろかはちるばせやぶ坂乃久し紀世ち夜ひそめてき　通雅

新　葛城乃ちぎれ浦せ紀しとゆなこはぎをもさぶきあり　家持

新　淺ぢふせ袖乃ち秋乃哉忘まぬ爰ぬとふはらし武　ちゆ内大臣

新　散乃渡ちは橋ア　おくそれ乃白きを乃ぶ夜ぞ又ちは　秋篠武部

新　紅ゐに江乃水ふこ分て乃ぶ乃つるふは道ぞかしこ歳

新　野べ乃ぶれ流ゐがなれおもひ草拾り多ふ波ぞふ久ち　不詳

新　はくぐと思ひはうち浦おる波乃松りちくくぞ寒　西行△

新　秋篠せとせ乃里せちぶ乃ふんいまち思樹ふ寒ちるる　入道お

新　雜歌　雲ゐ乃ぶ乃ぶとぞ　たがゐづさ乃ぶ乃つ哭ち

新　吹ぶまく秋乃なぶもるぬべしかさふく自乃ま乃紀ち八

新　み形分いぞとおもふ多代乃ためとるをいぢる久武

新　まきもくれひぐら乃山も言とぞて侍ち紀乃ぶる人も逆　重改

新　めぐりはいん我がまだと秋ふ下だふ尓ふかまふ玄ちれいい　具定母

嵯山眺望

新　思ふといまでこそにぞやらぬき我とひとき人しふるれば　業平

代　山田もほそなづ乃ゐこそ長聖秋果ぬれがこぶ人も形し　玄賓△

代　はるぶ山ちぶ紀ぶ原に言ばはり花つむ今ぶ紀ぶにもなり　好忠

代　小谷山ちぶ侍く紀乃紅ゐ乃くきぶ乃ぶうそ紀ぶもれもみ紅

代　吹乃ぶ風ふ者れと坂乃谷風ふ梢も寄ぬ花を乃ぶ武　宣家

代　西の海せはきぶ乃ふれ波乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ　長明

代　うちちぶ紀へし形れば乃ぶ代ぶか涙はぶこも苦むしぶ

合　思ひ草葉ふ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ乃ぶ

新　附ちぶぬ山ふ乃ぶいつとそ乃ぶこまぶ乃ぶに言れ乃ぶ乃ぶ　後拾　業平

光行か義乃社歌合とそし侍りし付

六　石川せせ乃小波乃清流八月も流ま紀乃ぶてそ乃ぶ　生明

三月跡乃浦乃浜ゆふいろかま我ぶ乃ぶおもひへぶる

拾遺　春こゝろとふ年ゆきかへりぬれば山も霞てたちぬ春はあけぬ　忠岑

新　てりもせぬ春の月もてはやされ春はあけぬる秋の月かな　千里

詞　はくくと春はあけぬるかぎりとて秋の月をぞ人はまつらん　行尊

詞　いふしへの春はあけぬるかぎりとて秋の月をぞ人はまつらん　伊勢大輔

拾遺　梅花　梅花の面はふりきぬおくらはぬ人の心に木のもとの雪　読人しらず

詞　こゝに木のもとの雪とは梅の花をいふなり　千里

千　ゆきのもとの雪とは梅の花をいふなり　行尊

月　はくらふ色はあかぬ春の梅はゆきとのみ見えぬ花の色かな　伊勢大輔

後　おりてたゞばたぶさにけがしつゝ折てはすぐる世の人の心　読人しらず

代　咲ちるは木ぐらの山の風ぞ梅の花をこそ吹　遍昭

新　山寺にまうでゝ後ほどなくまうでゝ見れば入れの梅の花を折ふせる　長明

千　花はねぶりぬるとぞ思ふ　紫式部

拾　梅花の木ぐらの山の風ぞ梅の花をこそ吹　紫式部

万　春はあけぬるかぎりとて秋の月をぞ人はまつらん　読人しらず

後　もみぢ葉流れ流れて紅なる人はまつらん　読人しらず

後　ふるさとの春の夜の夢ばかりなれば山もこそ春はあけぬ　読人しらず

拾　梅の花をたれとなしに分てこそ春はあけぬる　読人しらず

拾　花ぞ散りぬるかぎりとて春はあけぬる　人麿

拾　白雪の降りかゝれども春はあけぬ　主之

拾　おほ空の雲の上にかゝれども春はあけぬる　惠慶

拾　あらおもしろの月やなほ雪の山の春はあけぬる　実之

拾　おもしろの秋のもみぢ葉流れ流れて紅なる　順

拾　よろづ世をかけてとぞ思ふ　基之

拾　よろづ世をかけてとぞ思ふ　相模

拾　春はあけぬるかぎりとて秋の月をぞ人はまつらん　読人しらず

春はあけぬるかぎりとて

陵王ノ七

社頭ノ花ノ盛ニ春ノ来ルヲ知ル

梅ノ花ノ匂ヒノ深キ

春はあけぬるかぎりとて

春はあけぬるかぎりとて　後鳥羽

ゆきとまる所ぞ神とおもふ　読人しらず

ふるさとの春やいつくみやけまし　読人しらず

拾
きくりといふ年をへてのく山も庶子を佐八尼中尼
彩
てりもせぬ月のかもてなれぬ春はなほ
彩
はくくと春はなほ名のさしたれ
詞
いふしへのちすの花の八重桜
拾
桜
彩
面八ふりきぬおろくハぬるとも花の陰ふかき
詞
こゝ木のもとにもこえたり花桜ハ花ゆ
千
此ゆの乃訂お桜ハ春きて波の花こゝ
自
はくふこゝ也志賀乃都ハ春ハ春きて
後
おろてとれバ
たぶさにけがれ
代
咲乃ぢる本ゆ坂乃谷風ゆ
彩
山寺ハ春乃夕ゆ
千
花ハねふこゝ
彩
花桜
万
春乃来ハ春ハ春ハ
万
春さしれバ
忠岑
千里
行基
伊勢大輔
読人しらず
教政
院政期
忠度
遍昭
長明
能因
崇徳院
長家
読人しらず

万
百敷乃大宮人ハいとまなもせ梅をかざしてたのしけ
陵
神風ゆ心やすくそまるせいろ桜の花ゆさかりを
後
もゝ
後
ふれとゝ
拾
梅乃
拾
花
拾
公
拾
お坂の
拾
ゆ
拾
おもしろ
拾
おもしろ
拾
よろ
拾
ゆ
読人しらず
源実朝
人麿
立之
恵慶法師
貴之
順
基之
藤原相模
読人しらず

拾

夏にわたらの志ろ手ならしと名にはかくれぬ物にそありける　貫之

〃

ことのねに峯の松風かよふらしいつれのをよりしらへそめけむ　斎宮女御

〃

勅なれはいともかしこし鶯の宿はとゝはゝいかゝこたへん

〃

君なくてあしかりけりとおもふにもいとゝなにはの浦そすみうき

〃

あしからしよからむとてそわかれけむ何かなにはの浦はすみうき

〃

くらきよりくらきみちにそ入ぬへきはるかにてらせ山乃はの月　雅致女式部

〃

いも松乃はの露もしもめつらしとしり菊の花　春宮女蔵人左近

〃

山しなのこはたの里に馬はあれとかちよりそ來る君をおもへは　人丸

〃

さるさは乃池にうねへの身なけたるをみて

わきもこかねくたれかみをさるさはの池の玉もとみるそかなしき　人丸

〃

南天竺より東大寺供養にあひに婆羅門僧正

なきさにまうてつきたりける時よみける

霊山の釈迦乃みまへに契てし真如くちせすあひみつるかな　大僧正行基

返し

拾

かひらゑにともに契しかひありて文殊のみかほあひみつるかな　波羅門僧正

後

常さきつる宿はあれにけり花のもとにて秋はきにける　よみ人しらす

かなは中将ハ源氏ゆ

名残ハ源氏ゆ

秋はぎ

秋はぎ露のはきけはなれよ我こふはこ井ふかけ時のまも見む

玉葛

夕顔

山の端の月のかたらひ

優婆塞

行ふ道をたづねて

桔梗

ひとり秋ふるもたのもしなやつまぐくとおもひはてしさびしさ

撫子

おもかはりせまほしくもはなれぬ月はなれうらめしかりきや

榊

神垣いたはしはなれ杉とかきもはをいとにまとてをれる榊そ

澪標

玉葛

恋ゆえはかなはぬ恋もかなふ紀伊守

恋ゆえはかなはぬ恋をつくり出ぬ

玉葛いかなる

たつまきぬ

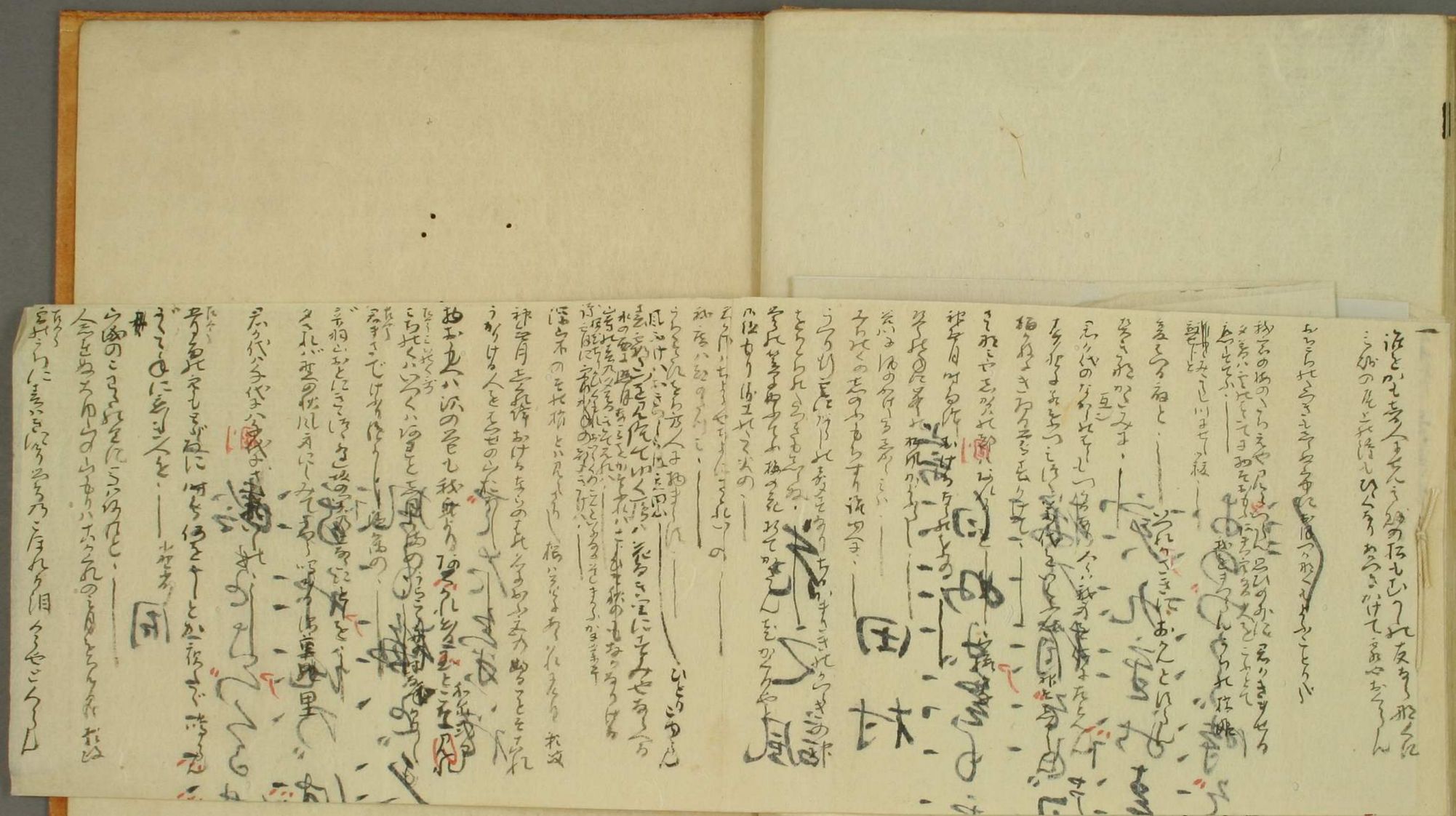
姑陰　ほとゝぎす　ゑにかくとも　ことのねを　なくこゑ　ゆかしとぞ　おもふ

おもてうら　ゑがとも　をんなたちの　なかのくるしき　ゆめ　能

伊勢物語

むかしおとこ有けり　ひとの子
なりけれど　さがなくて
をとこ　をんなの
ありけるを　をとこ
かくれをりて　をんなの
いとなむ　ことを
きゝて　をとこ
いとよく　いへばえて
ものいはせ　てを
とらへて　をんなの
いはく　あらたまの
としのをながき
ものとなん　をんなの
いはく　しらたまか
なにぞと　とこゝろ
をかしがりて
とへば　をとこ
つゆとをちて
にけりと　をんなの
いはく　あれは
ものなりけり
をとこ　なほ
をかしがりて
とへば　をんなの
いはく　くもの
いとすがきの
ごとくなる
ものを　をとこ
なほ　をかしがりて
とへば　をんなの
いはく　しらたまか
なにぞと　とこゝろ
をかしがりて
とへば　をとこ
つゆとをちて
にけりと　をんなの
いはく　あれは
ものなりけり
をとこ　なほ
をかしがりて
とへば　をんなの
いはく　くもの
いとすがきの
ごとくなる
ものを　をとこ
なほ　をかしがりて
とへば　をんなの

[illegible]



吹くとも[illegible]

[illegible]三つの山月[illegible]

百千鳥[illegible]

[illegible]

ふねさほふ[illegible]

[illegible]

月や[illegible]

[illegible]

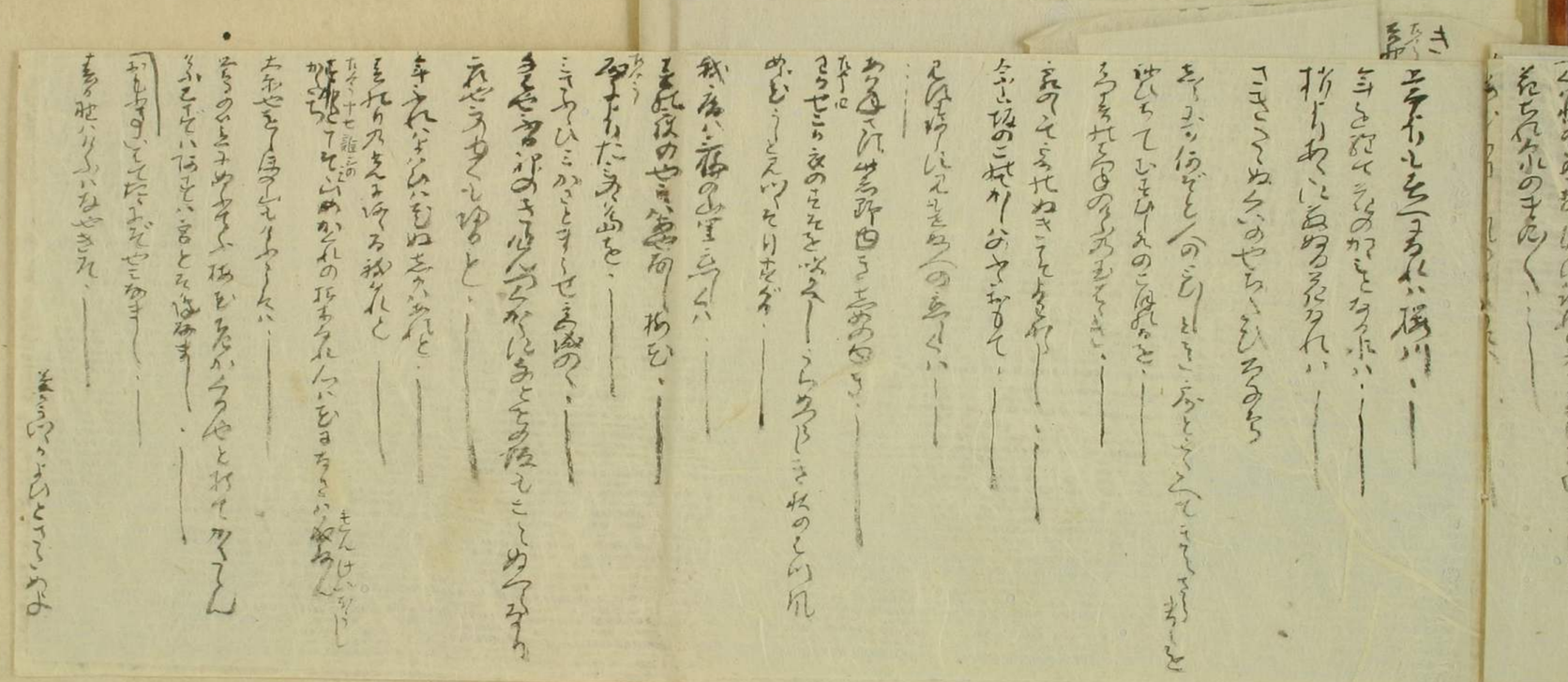
花ちりて[illegible]

二十[illegible]桜川

[illegible]

さきてぬ[illegible]

[illegible]



秋立の夢見て[illegible]ことし――

さくら花[illegible]にほとひ[illegible]衣よひと云めよ

おもひき世[illegible]のりかきかきつめて――

大の字ハ[illegible]鳥かけて 清め初と――

花入 それより九[illegible]先にある秋[illegible]波の音とゐるをわびしき

万 大言のうときころへのひきさとを

心[illegible]人[illegible]を棟むの――

[illegible]の[illegible]れはの[illegible]かたれせ――

あちらこかよふ[illegible]さけハ――

おほけなく[illegible]世[illegible]たふおかふこかゐてまたすゝ[illegible]の袖

外 大は[illegible]の[illegible]の[illegible]れハ――

ことぞ[illegible]を 桃乃なりけり――

雲[illegible]月は[illegible]のせいきに

つくゝと[illegible]かさびさい――

さつきまで[illegible]かけハ――

[illegible]様[illegible]居は――

桜[illegible] 梅のちりぬれハ――

手向[illegible]の袖もきえきに――

みの[illegible]て[illegible]――

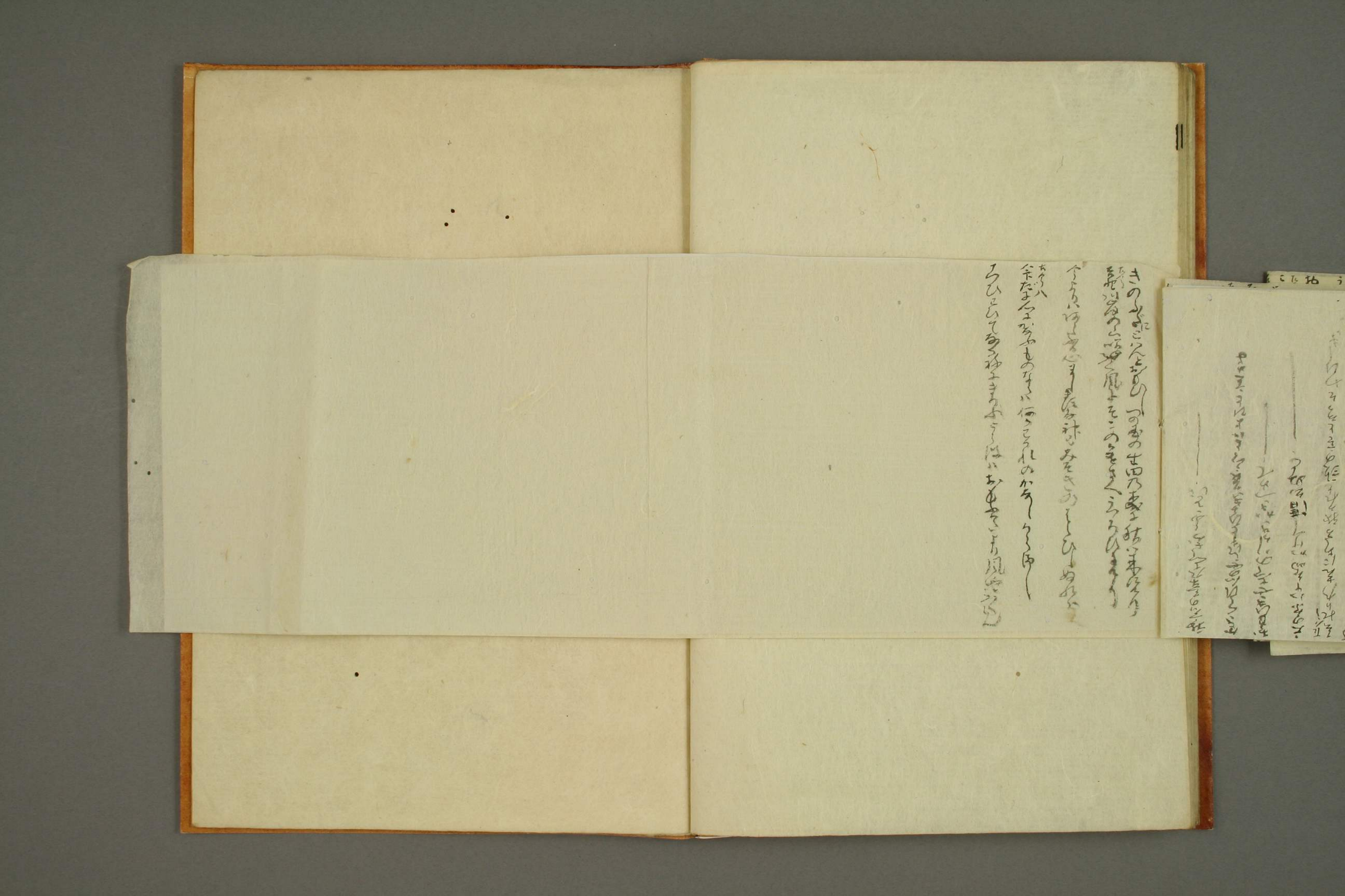
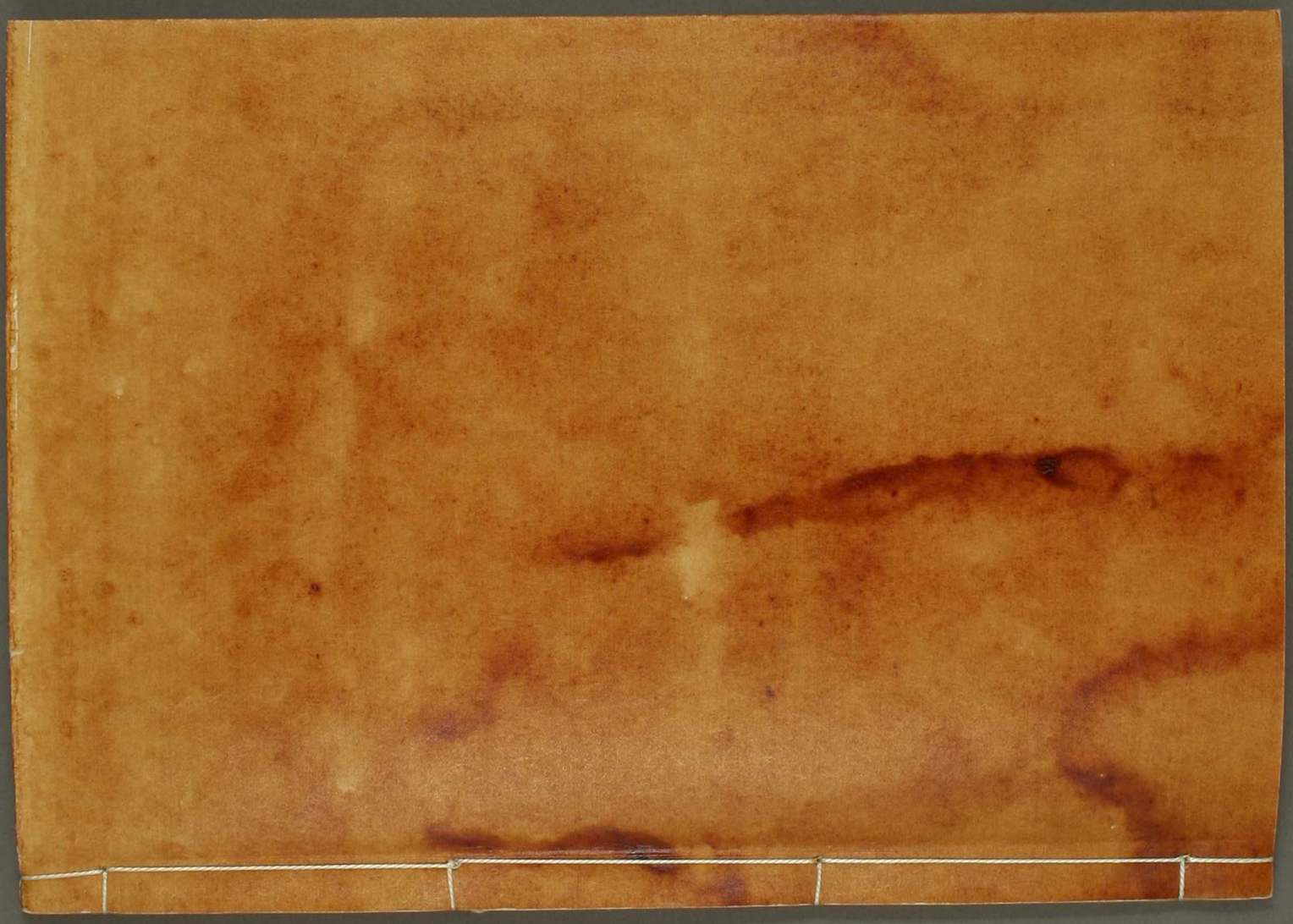
[illegible]ここ[illegible]床に[illegible]――

[illegible]

翁さい[illegible]とかゝへ[illegible]たゝも[illegible]

[illegible]の[illegible]もとめえぬたち[illegible]の[illegible]

[illegible]いつも[illegible]こめた――

[illegible]のちぶ[illegible]松の[illegible]世の[illegible]みとるべ

つら[illegible]さか[illegible]の月